広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	作文課題と、書きつける以前の子どもたちの発想について
Author(s)	松原, 俊一
Citation	児童の言語生態研究 , 4 : 33 - 38
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045048
Right	
Relation	

作文課題と、書きつける以前の子どもたちの発想について

松原俊一

作文課題が、子どもたちの発想にいかなる影響を与えるか ー 即ち作文課題によって、子どもたちの書く作文が、その思考の方向と感情の流れ方をどう決定して行くか、もし、一つの作文課題から受けるイメージが何かあるとすれば、イメージを起させ易い課題と、難いものとが予想される。本調査では、特に起りにくいと思われるものを選んでみたのである。全く起らないものでは意味がない。イメージが何か起りそうなもので、それでいて目新しい、耳新しい課題をと考えたのである。根本的な考え方としては、新しいイメージの子ども自身の開発を目的とする。教師側から言えば子どもが新しく経験する未熟なイメージづくりを挑発することは、子どもたちの作文能力の現在地点を露顕させる結果となる。またそのことは、子ども自らの新しい世界への挑戦ともなっていると考えるからである。

本調査では、次の三つの作文課題を用意し書かせてみた。

（方　法）

課題は教室において板書し、原稿用紙に自由に書かせた。

一、影をしたいて（五月一日実施）

二、すずめの子そこのけそこのけお馬が通る（五月七日実施）

三、朝のこない夜はない（五月二〇日実施）

（注）作文課題の意味説明は行わない。

対象児童・東京都港区立港南小学校・六年二組三〇名

一、「影をしたいて」の場合

二十八名の子ども達の書いた〝影をしたいて〟の作文を読んでみると、この場合、以下に報告する五タイプ十二類の発想のタイプが見届けられた。他の作文課題との関連も予想して、詳細に分析を加えていってみる。

ー資料1ー　影をしたいて

あるさむい夜、子どもが母親とたのしそうに歩いていました。でも、すこしたって子どもの泣き声がきこえて、母親がはなれて行きました。

「どこへ行くの？」、子どもは母親の去ってゆくうしろすがたの、影をしたいて泣いていました。でも影を見失なうと、子どもは泣きながらふらふらして、いなくなってしまいました。よく朝、またきのうの夜の子どもが泣いていた。交通事故らしい。子どもが泣いていた。顔をまっかにして、その夜も子どもは泣いていた。雨のふる中を、まるで死んだ母親をよびもどそうと、しているように。いや〼 母親の影をしたいて。

S M 女

このタイトル〝影をしたいて〟の〝て〟は、〝～をして〟の接続としての〝て〟ではなく、あくまでも情的・余情的な〝て〟である。そしてその方向でのイメ

ージが書き手に想起されて来ない限り、このタイトルでの文章は綴れない筈である。その意味でも、この子はよくその方向でのイメージをひらめかせていることが、その文から感じとられる。

起筆は、「あるさむい夜、子どもが母とたのしそうに歩いていました…」である。その「ある：」は、どこと場所が定まっている訳ではない。「さむい夜：」にしても、何月何日何処の場所の何時頃か明らかではない。いわば大変に観念的であり、「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました：」という昔物語の冒頭部と対比的である。「むかしむかし：」は、何時の頃か勿論明確になっている訳ではない。「あるところにおじいさんと：」にしても具体的には何も示されていない。それが故にこの子の作文と相対的に捉えられるのであるが、その相方からたいへんな一種の超現実観を与えられることも特徴的である。時間と空間の規定を一切ぼかしてしまう観念的なイメージが我々に与えられる。

それが、「○月○日、さむい気温○度の夜、はなをたらした子どもと、みすぼらしい母親が：」と書かれると、その定型化故に、イメージの自由さはなくなりさほどの興味も覚えない。問題は、この子がこのタイトルを前にして抱いた発想が、このような超現実的な発想であったと言うことである。〃影をしたいて〃のタイトル自体に、我々人間は、朦朧とした、その言葉の後に〃…〃でも付加したくなるような暗い、そして余情的なムードを感じとり、感覚的に暗い方向へと行く何かを覚えるのであるから書き手において、それらの感情の芽生えのあることが何よりも大切なこととなる。

よく言葉を使うと言うことが言われるが、言葉を使うとは、道具を使うと言うことではなく、その言葉の感覚がその子のものになっているか、つまりその言葉に裏打ちできる感覚を持っているかどうかの問題として捉えると、右にのべた「感情の芽生えのあること：」と言うことが一層明確になってくる筈である。

つまり〃影をしたいて〃の言葉から一般的に感じとられる感覚や気分を、そのものとして把捉しうるまでにその子の感覚世界が発達を遂げているかどうかにかかわってくる問題であると思うからである。

この子の作文には、よくそれが現われている。寒い夜子どもから母親を引き離させ、その後ろ姿を暮わせ子どもを泣かせ、母親を何処かへ行かせ、その夜どうなったか少しも述べず、更に翌朝、交通事故で母親を死なせ、その上に雨までふらせている。そして、そのあと「いや、母親の影をしたいて：」と筆を止めている。

全体的にムードとしては陰うつで暗い。結局〃影をしたいて〃の言葉自体が、すでにのべたように暗い方向へと我々の感覚を走らせる何かを持っている（人間が感ずるということ）のであるから、この子の作文もそのようなムードになったことは当然みとめてもいい。

二十八名の子ども達の中で、この例を示したのは右のひとりであった。

Aタイプ

以下に頑としてまとめた第一類五例は、〃影をしたいて〃の意味把握を、論理的思考によって、把捉しようと試みている一群である。概してその特徴は、作文課題の定義付けの方法をとっていることが特徴的である。

第一類　とは型

ー資料2ー

影をしたいて、とは、ゆめを見ていることではないかと思う。たとえば親子だったら、お母さんのいない子が、心の中でおかあさんの影をたのしくゆめをみるようなことだと思う。なんとなく見える影がゆめなのだと思う。

S H 女（他七名）

起筆は、タイトル〃影をしたいて〃に対する自分なりの捉え方の、即ち提示、及び自分自身の構えの提示である。その構えは、〃影をしたいて〃イコール〃夢を見ていること〃であり、その具体的詳述が「たとえば：」以下になる。ここの「たとえば」は、比喩と言うより敷衍ととるべきであろう。構えとはそのものに対する限定であり輪廓の定めである。であるからその詳述は、幾重にも重なって広がる、波紋のような論理をとるのが特徴的であろう。

ー資料3ー　影をしたいて

私は、影をしたう［というのは］自分が美しい影になりたいと言うことだと思う。

美しい影とは、何かの美しい大木などでその影になりたいと言うことです。

私は影は静かで気もち良い所だと思い、大木の影のように静かにくらしたいと考えました。

T N 女　他一名（女子）

ー資料4ー　影をしたいて

影をしたう、［とは］二人がなつか

しがってあいたいことを言う。それをもっとくわしく説明すると、二人の親しい人がいるとする。もしその一人がもう一人の人にあいたいとあとをおう。つまりその人のあとを追って、会いに行くことだと思う。その二人は、もう会いたくてがまんできなくて、一人は一人を追い、もう一人も同じようにして、さいごには二人とも会える。影をしたいて、と言うことは、会いたい人のあとを追っているときを言うんだと思う。

K H 男

―資料5　6―　影をしたいて

「影をしたいて」なんてどんなときに使う言葉なんだろう。

きっとだれかの影になってその人のことをよく知りたいという人が影をしたうのかもしれない。

でも、「影をしたいて」なんて、ふだん私の口から出る言葉ではないだろう。影という意味は「おもかげ」という意味とちがうのだろうか。もし「おもかげ」ならば、「影をしたいて」と言う意味がはっきりとわかってくる。

だから、「影をしたいて」というのは、「おもかげ」と言う言葉と同じようなことだと思う。

N A 女
（他　一名）

これまでに見てきた子ども達のタイトルへの迫まり方の特徴は、子どもたちのこれまでの成長過程において獲得してきた感情、思考を総括させて、対象としてのタイトルに如何に迫まり、自分なりの理解として、「影をしたいて」をどう定義して行くかということに止まった。この子においても結局は語義に終始するのであるけれども、第一類と区別させる点は、第一類が「影をしたいて」を直ちに定義して置換えようとし、いわゆる定義的物の言い方として「：とは」から起筆され、置換えまでのその子の状態は殆んどことばの上には現われていない。第二類はその点、「影をしたいてなんて、どんな時に使うコトバなんだろう」と始め自己のためらいそのまま把えて行く。それはまた疑問の対象に対してのさぐりということもできる。それがために、この作文に見られるような「：なんて」「きっと：」「でも：」「だろうか：」「もし：」の如き語が多く用いられているのも特徴である。つまり、これらの語を用いて、見当をつけて自分の発想をたしかめてみるといった思考法がとられているといえないだろうか。

―資料7―　影をしたいて

影をしたう、と言っても、わたしのまわりには、人の影・建物の影がたくさんあるが…、よく話に、ピーターパンが影をなくしてしたってとりもどしてきた話。さばくで影がなくて、影をさがす人。それにもし地球上から影がなくなったらなんの生きものも建物もなく、夜もない。そんなただの星になってしまう。よく真夏にあつくて、木の木影で休んだらやっと生きたここちがするだろう。それに自分に影がなかったら、影でよく遊びがあるけれど、できないだろう。それに相手を尾行するとき影を見ていればすぐわかる。影がなかったらみんな影をしたうだろう。だから影をしたいてのことは、こういうことだと思う。

I Y 女

それだけに終末に「だから：」として、集約的終末発想を採っていることも特徴的である。

第三類

―資料8―　影をしたいて

自分の影をしたいていくと、きっと、かぎりなく、歩きつづいていくことだろう。小さいころ影はどうしてつかまえられないのだろう。なんて思いながら影の頭をつかまえようとしてかけずりまわったのは、今にしちゃあばかばかしいと思うだろうが、おもしろい思い出だった。

そして、まだ小さいころの思い出に、夜お母さんが影のように出かけて行って、そのあとを追おうと思ったこともあった。その影をしたいてどこまでも追ってゆくゆめを見たこともあったなあ。

親しい人のあとを、おさなく、単純な考えで、そっと、おって行きたいような、気もちに、なる。ぼくは、こう思う。

H K 男
（他になし）

この作文のタイトル〃影をしたいて〃の〃て〃に如何なる意味を認めるかと言う所から、発想は異なって来るはずである。

この資料に見られる通り、「影をしたいて」のタイトルの冒頭に、「自分の」を付加し、そのあとに「いくと：」とつなげて、「自分のかげをしたいていくと」と起筆している。「自分の」と「～いくと」とを前後に補充することによって、この書き手は、この難解な作文課題を自由なものにしている。果して、そういう作為が行われたかどうかは疑問であるが、「影をしたいて」の課題を夢幻性において把えず、現実の投影として、書き手の生活経験の中に把捉したことは、天晴れという他ない。それだけにこの難関が突破できた以上、この書き手はあとは自分の生活経験の回想にふければよかっただけになる。ただこの資料をやっぱりAタイプに所属せしめたのは、文末の〃ぼくはこう思う〃の発想の終着を見せつけられたからである。

ー資料9ー

影は目に見える。手でさわれない。よく影などして遊んだが、光のない国は、ハワイがうらやましいでしょう。いつもいつも雨のふっている国、かさをさして遊んでいた子どもたちが急に光や影ができたら、どんなにうれしいでしょう。でも、そのいっしゅんだけあとはいつも雨がふっている国。

影をしたいて、影をしたいていつまでも追っていく人。「影をしたいて」とは、こういうようなことだと思う。

I N 女（他 一名）

第三類と逆の発想で、現実から夢幻への傾向を示している。〃影をしたいて〃から光を求めているとしたのも考えさせられることである。

第四類

ー資料10ー

影・この場合の影はふつう日にあたる。そして写るという簡単な影とは全然違う。この最初の影というのは、とてもむずかしいものだ。影というのはおそろしいものかもしれない。影というものは、なんともいえないことかもしれないと思う。だから、影をしたいていうのは、なんだか、こわいものかもしれないと思う。

M C 女

これは現実の生活の投影でもなければ、ましてや夢幻への誘いでもない。あるものは、〃影〃の語によって呼び起される、自分の感情をたずねることによって回答している。

○この最初の影というのは、とてもむずかしいものだ。
○影というのは、おそろしいものかもしれない。
○影というのは、なんともいえないことかもしれない。

と思う。

○だから、影をしたいてというのは、なんだかこわいものかもしれないと思う。

第一類のとは型、第二類の自問型と区別させるものは、自分の実感が頼りであって、そのために、とは型まで突き離せない。「～というのは」といわなくてはならぬのも頷かさせられる。従って、「～かもしれない」を列挙してしまう。

Bタイプ　関係思考型

第一類　（光と影型）

ー資料11ー

影をしたいて

影というのは見えないもので、あとを追ってくる。とまると影もとまる。つまりもうひとりの人間ということになる。

しかしその影には光がないとあらわれない。だけど影はいつもそばにいる。もし、このような影がなかったら人間もいないということになる。

なぜかと言うと、人間がいるから影もあるし、人間が動くから影も動く。つまり影はいっしょに動く友達のようなものである。

I S 女（他 三名）

第二類　比喩による思考

ー資料12ー

影と言っても地面に写る影ではなく、自分の心みたいに目に見えない。それは、自分の心にある考え、または人にわからない心などだと思う。つまり、影の反対の日なたと言うのは、ほかの人が知っていたり、わかっていたりする部分で、影はうそやいつわりなどのことも入る。それにはまた、自分の過去のこともあると思う。

だから、影をしたいて、と言うことは、そう言う自分の影になっていることを考え、思っている。

S H 男（他 三名）

―資料13―　影をしたいて

影は、形あるものにはできる。しかし、生命のある人物にできるのと、ないのにできるのではちがうだろう。

そして、この影は、かってにできるのだが、このかってと言う意味がちがう。自然現象である。その影たちはその物についている。いや、ついているのではない。ついてきてくれているのだ。

この影は、生命の一部として考えなければならないだろう。それは、もしぼくたちに影ができなかったら、お化けとかゆうれいだとか言われるだろう。

だから影は、生命の一部だろう。

影はぼくをしたってくれている。そして、ぼくは影をしたわなくてはいけないだろう。

B H 男

Cタイプ

以下にCタイプとしてとりまとめた作文の特質を、A・Bの各タイプと比較して結論的にのべると、次のようなことである。

Aタイプ（一名）の作文は〝影をしたいて〟の感情世界に自分をさらすことのできた作文であり、次のBタイプは〝影をしたいて〟の意味世界の把握を、そのタイトルそのものを自分の眼前にすえて〝「影をしたいて」とは：〟と、定義確認の時点から出発して、自分なりにその意味世界を論理的思考でもって転換させようとしたものであった。更にCタイプは、タイトルの意味転換と言うこととは本質的には変わりはないがただその転換を、〝影〟の意味把握から出発させようとした発想群であった。

これら三タイプともに共通して言いうることは、大変に抽象度の高いこの〝影をしたいて〟の意味世界に対面した際、まがりなりにでも、何とかして自己の世界の中に転換させようとするその意味には大変なものがあったと言うことである。ある子は、ようやく辿りついた意味世界を前にして筆を止めざるを得なくなったり、ある子は、徹底した転換をおこない、自分の世界にとり込むべく努力していた。言うなれば、タイトル〝影をしたいて〟の転換の心的葛藤過程が、これまでの子ども達の書くと言うことであった。《子ども達が何故にタイトルの定義付けをおこなったのかと言うことの原因が、そこに求められると思う》

ところが、Cタイプとしてまとめた資料群の特徴は以上A・B・Cのいずれにも共通性を持たない、全く別の意味世界の方向へと発想が流れた一群である。

回想からのまとめ

―資料14―

（ちがうかもしれない）　学校へ入った時、よくかげおいをしてあそんでいた。天気のいい日は影がうつる。自分がにげると、影は僕に追いつこうとする。だけど、かげはなかなか追いつかない。ぼくがまがると、かげが追いついてきて、かげの方が前に出る。かげって僕のあとについてきている。かげって、ぼくはあまり好きでないけれど、かげが、かってについてくる。かげは、やっていることをまねしているだけだと思う。

I M 男（他 二名）

喚起されたイメージは〝影追い〟である。しかし、この子は、作文の冒頭において、（ ）付きで、ちがうかもしれないと前置きしていることである。結局は自分の連想したイメージと〝影をしたいて〟のイメージとの間に何らかの決定的な隔絶を直観したからにちがいない。ただ、そのためらいと、作文を書かなくてはならないという課題意識とは、本質的に質の異なる時限のものであったため、ためらいはためらいとして、（ ）付きで残しておき、自らの把捉しうる世界で作文を書いたと思われる。

論理構成について言えば「学校へ入ったとき、よくかげ追いをしてあそんだ」が、起筆の発想となっており、それはまたタイトルによって触発された過去の生活経験の想起でもある。次の「天気のいい日は：」から「：かげって、ぼくのあとについてきてくれる。」までは、影追いにまつわる連想となっている。そして終筆は「かげってぼくはあまり好きではないけれど～やっていることをまねしているだけだと思う。」までであり、一種の終りと止めを意識しての感想である。

―資料15―

小さい時、私は自分で自分の影を追いました。ぐるぐると追いかけまわした。そしてつかれてそこにねころんだ時も影はいっしょでした。でも、くもっている時や夜になると影は出てきませんでした。小さい時私はふしぎがりました。……（以下略）

T k 女（他 一名）

Dタイプ　感傷型

第一類　物語への連想

―資料16―

ある村の六年生のお兄さんと、その下に三人も子どものいる母がいました。父は六年の兄が一年の時、おもい病気で死にました。そして母もいま、病気で苦しんでいます。兄は母のために三人の弟たちをおいて、遠い薬草の影をしたいて、長い旅にいきました。そしてある日、兄はやっと、薬草の影を見つけることができました。それをとった兄は、いそいで家に帰りました。ところが兄が家の前にきたとき、母は息をひきとりました。兄は、せっかく薬草のかげをしたいてとってきたことが、むだになったので、くやしがっています。

Y H 女

私事になるが、この結果は、以前私が話した『山梨の実』と言う物語からの影響にちがいない。だから、ストーリーや、内容そのものには興味を覚えなかったが、「影をしたいて」のタイトルから、そのような物語を連想したその発想そのものに興味を覚えた。問題点は、幾つか指摘しうる。例えば、「薬草の影」とは実物の影を言うのか、また、おもかげ的なものか不明である。更に「薬草の影をしたいて、とってきたことが：」などは、文法的に直観的にも不自然である。ただそれらの点を省けば、この作文題がこのように物語風に、仕立てあげさせる連想刺戟を持っていることがおもしろく思われる。

一般的に〝影をしたいて〟のタイトルに対して、知的ではない、感覚的な何かを、私たち大人は感じとることが可能である。それは、過去のどこかで、そのような感覚を身につけたからであろうが、大人より成長の遅い子ども達にあっては、決してそうではなかったはずである。これまでに見て来たように、〝影をしたいて〟の作文を書くと言う力は、従来言われている作文技能とか、単なるテクニックでは決してなく、書く以前にすでに、できあがっている力であった。そしてそれは、生長発達する子ども達の思考、感情と常に比例しつつあると力と言うことでもある。

その意味で、この子が直接的にしろ、大人の持っているような〝影をしたいて〟的世界を指向していたと言うことに、関心をよせさせられることであった。

第二類　（心の影）

―資料17―　影をしたいて

ぼくの心の中の影をしたいて、ないている。その心の中の影にはいろいろな悲しいことやら、くやしいことなどが、たまっている。それを見て、影の中に入って、そのかなしみや、くやしいことをおい出してやろうとないているのだろう。ときにはかなしいことも、くやしいこともないときは、きっとその中に入っておいだしている。

それは、いつも心の中のかげをしたいて、見まもっているのだろう。

K S 男

正直言って、よくわからない作文であった。「ぼくの心の中の影をしたいてないている：」と言うのは、一体如何なることか。「心の中の影」とは？。「ないている」のは誰か。全くわからなかった。本人を呼んで「心の影とは何か？」と説明を求めたが要を得ず、およそ次のようなことをのべた。

「この心の中の影とは、反対に心の中には明るい方の心と言うものがあり、いつも明るくたのしいような感じでいっぱいの心です。だが、心の中のかげは、いつも悲しいことや何かが、いっぱいつまっている、つまり、すみっこの影です」

（以下紙数の関係で、「すずめの子そこのけそこのけお馬が通る」と「朝のこない夜はない」の報告は割愛する。）